

秋津 章 詠

歌集 GRAMINA

秋津章歌集

GRAMINA



京都大学文学部旧館（現存しない）

説話を拒む過去のみ執拗にわが脳髓の秘部にくひこむ

人知れず瀬音しづかにきらめいて流れるだけの川になりたい

いとほしく寄辺なき歌くちびるをしばしそよがせ消えうせにけり

自分より自分の影が美しい歩いてゆかむ俯いたまま

たましひは無為に顫^{ふる}へて閉ぢるのか生のありかが黙示されても

ボクがボクボクこそがボクボクだけがボクあなたにはわからないこと

わがやどを侮り、犯し、辱め、風荒むなり万有の夜

生きものはボクだけでいい、幼子の疝氣にも似た強き断案

てのひらに顔をうづめる黙想の姿いつしか身につきにけり

精神の癌を患ふ、そこにこそあるのだ、ボクの誇りさへもが

ちぎれ飛ぶ雲か我が身か空の果ておそれもなくこころを放つ

音もなく自閉せよとて雪が降る世界を白く否定しながら

花をみて慰めるべきころさへ喪^なくしたボクに春の陽が降る

過ぎさりし年を惜しめばこの春に彩り映えて揺れる花かな

ふたつなき生の理念が何であれ花咲くころは虚無にしたしむ

はるさめにぬれるこずゑの花びらはうすくれなるのいろぞまされる

霏霏として散りゆく花をいつまでもながめよとてか暮れなづむ空

花をよむ自分をそつと哀れむでいたはるやうに深呼吸する

ゆらめくは人間模様自己愛の妖怪変化春夏秋冬

光翳交錯しては移ろひて幽^{かそ}けき夢のごとき淡雪

晴れわたる桜花浄土の莊嚴を象るものは血まみれの鳩

うさうさと懶い春の日曜日ただ漫然とヒトにまぎれる

ことしまたかたみに名のることもなく別れき我と夏の野の花

たまゆらに^{ただす}糺の森の夕日影あきつの翅をきらめかせたり

死刑囚独房のこの空間に冬の雨夜の闇が満ちくる

茫漠とけふ一日を見送れば壁にむかひて心さぶしも

悪びれず弱きおのれを肯定し慰むことを敗北といふ

行けこれが最後の助走空無へと身を躍らせてふつと消えなむ

おしなべてはかなむにたるゆふづくよふがないほどしづかな私

あなたよりかなしみふかきものありとつぶやきてほほゑみしきみはも

天井を見つたどれり過ぎし日の赤面すべき想ひ出の列

祭礼の日にこそあはれ癡人の意識鋭く覚めて傷めり

文字どほりあるかなきかの我が身にて日々のたゆたひとめどもあらず

暗き眼でためらひがちにふりかへるひとけ絶えたる街路の真昼

ひたぶるに夕陽の色の悲しさよ明日なきものに寄りそふごとく

黙秘して死ねと自分に言ひふくめ心ゆくまでうぬぼれてみる

やはらかく世に従ふと見せかける虚偽に長けたり違和の児として

うるはしきわざをなしうるわが身かは行き暮れてまたうなだるのみ

気のふれしひとの幸こそ思はるれ乏しき食餌かみしむるとき

だからから見られたくない評価する他者の視線のうとましきかな

内容の如何を問はずつらいのはとりとめのない夢の中絶

一花離枝その花びらを両の手で受けとめてそれだけの我が春

夏草にふりそそぐ陽の劇しさにうつせみの世は揺らぎ頽れて

ひとむらのコスモス咲けりはぐれたる身に吹く風はむなしきものを

冬の日のかたむきやすく過ぐるかげ陰気な風の音ばかりする

よしてくれ人間どうしおたがひに通じ合へるとヘマをいふのは

おめでたいひとりよがりといふけれどそれなくしては生きてゆけない

渡世とはガマンかさねて生きのびる工夫することつまらないこと

一行詩みそひともじは東の間に爆ぜとびちりて消ゆる火花か

寢覚めして睫の泪ぬぐふとき思ひ出せない夢をかなしむ

みづからは光放たず照らされるだけのしろもの我も地球も

解きえない謎と知りつつあざかへすなぜいまここに我は在るのか

脱糞の際の羞ぢらひナマナマと日記にきに誌せり我は何もの

不気味なりニンゲンがゐるゾロゾロと何やらいはくありさうにして

ひとりなり自身の声をきく機会なきままこの日たそがれむとす

わがこころ知るひとはなし籠りゐて語るにたらぬ噓くさめこそすれ

落ちてゆく原子のごとき物思ひ世を深々と悲観するまで

透きとほる意識の淵に黒々と蟠り伏すものに怯える

かくばかりすべなきものかわが生は何をどうしてみてもわびしく

事は去り時は移りて身ひとつの置きどころなき生に迷へり

あぢきなしいちどかぎりの世に生きて努力むなく滅にあふとは

自嘲また自嘲のリズムひたひたとわが精神の核を冒しつ

壊れたる心をさらに引き裂いて殴り書きする生き埋めの歌

あはれさはいづれかまさる実用の品か無用の歌か、わからぬ

やみがたき死と戯れてこともなく生よ己れを不条理とせよ

けなげにもわが身の幸を数へむとすれば不意打ち春の突風

やはやはと春の光に擦くすぐられほころびかける愛しきは花

憂鬱を払ふわづかな意志さへもしらじらとして夏至の夜は果つ

八月のしじまにまみを閉ぢるたり絶えし記憶の虚を咎めつつ

森厳な宇宙の大のかたすみの私ひとりの秋の夜の歌

秋の夜の月のかげこそただならねわが身もかげとなる心地する

落ち葉踏むかなはぬ夢とあきらめて淡いのぞみを打消すやうに

突然の抗ひがたき悲哀ゆゑ裸体わななく冬の浴室

さすらはむ僧侶のごとくさむざむと大地に薄き影を落として

かぜふけば風あめふれば雨しばしころあづけて我を忘れる

そのつどの生を自明となしえずに仰げば空は蒼き静謐

眩むまで悲しき生にうろたへて自虐せしこと十代にして

あまりにも周りが見えてゐなかつた、十代暗き命のままに

かたくなにこころ鎧ひし十代をこよなきものとおもひはてなむ

からみつくことばになづみ寐ねられず我は眼底ただれたる餓鬼

便宜的讓歩を重ねけふまでは齒軋りしつつ過ぐしきつれど

ふつつつとわが性欲を憎惡する熱き精液散らば散るとも

まだわからないのかここが地獄だと眞実告知するほどの愛

人間はだれもがみんな尊くてかけがのないものといふ嘘

ひとことで言へることもひとことで言ふてはならぬときもあるとか

凡庸な不平不満に苛まれごくありふれた寝返りをうつ

自他ともに責める謂れないことと覚れば無残終身無残

うそ寒き身を冷笑すマヤレヤレドウニカコノヘンデナンチャツテ

潰えたるわが詩わが夢ひかり充ち過ぎりゆくのか明日とてもまた

要するに無知にすぎない憧れといへば綺麗にきこえるけれど

問ふべきは未来計画ではなくてけふの没我の情熱の有無

花ふぶき偽りがたき美の圈にまぎれゆかむとする想ひあり

とこしへの眠りに誘ふかのやうな陽ざしのなかに立てる向日葵

いまここに秋はしづけし冴^さえ冴^ざえと全肯定の意志も深まる

きらきらと生滅流転なにごともなかつたことに結局はなる

涙への還元つひに帰らざる水に濁りはゆめなかるべし

床に就く前のひととき端座して何にともなく耳を澄ませり

いと高く聖なるものを指すごとく翔るヒバリの放恣陶醉

日うらうら三月の午後ためらずこの倦怠を幸福とよぶ

雲間より光ほのかにこぼれくる春の愁ひと名づけられるべく